

ヨハネ 13:1 以下で展開した主イエスと弟子たちとの「最後の晩餐」では、ハヌカの食事と洗足、世俗的なペトロの言動、イスカリオテのユダのことが目立つが、見落とせないのは、16:33 まで及んだイエスの言葉だ。

あの夕、イエスがユダに一切れのパンを渡した時、「サタンが彼の中に入り、ユダが外に出て行った。夜であった」(13:30)。

真に夜の暗闇は人の中にあった。直後イエスは「あなた方はわたしを探してもわたしの行く所に来ることは出来ないが、互いに愛し合うこと、それによってあなたたちがわたしの弟子であることを皆知るようになる」(13:35)と。

この書が著されたのは、ユダヤ人の基督教教会との決別と差別で基督者は危うく市民権を失い、その上ローマ皇帝ドミティアヌスの大迫害も加わった1世紀末だ。その状況下の成立ならば、イエスの互いに愛せよとの意味は、信徒同士助け合い、思い合い、手を取り合って時代の教会を守り抜けとの意味だ。が、それでもペトロは不安だった。「主よ、何処に生き給うや」と。

「クオ・ヴァディス」を著した百年前のポーランドのノーベル賞作家H・シェンキューヴィチは此処から行伝でいつの間にか姿を消したパウロやペトロらがローマのカタコンベで説教する消息を勿論架空だが伝えた。

「しかし、イエスご自身は彼らを信用されなかった。それは、全ての人のことを知っておられ、人間について誰からも証して貰う必要がなかった」(2:24)がある。そのイエスは、「ペトロ、はっきり言っておく、わたしのために命を捨てると言うのか。明日の朝鶏が三度鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言う」(13:38)と。

それでもイエスはペトロに「わたしのいる所にあなたがたが居られるように用意しに行く」との熱い言葉を遺した。デイドモのトマスもそうだ。「主よ何処へ行かれるのか、わたしたちには分かりません」(14:4)に対して、「我は道なり、真理なり、生命なり、我に由らでは誰にても父の御許に到る者無し」とイエスは応えた。

彼らはあのヨルダン川の向こうのイエスの洗礼地ベタニア(1:28)へユダヤ人の殺意から逃れた。主イエスの同志がいたからかも知れぬが、其処へエルサレム近郷のベタニアの三姉弟からラザロ重篤が知らされた時(10:40)トマスは「わたしたちも行って、先生と共に死のうではないか」(11:16)と叫んだ男だ。

更に、進退窮まった第三の男フィリポは「主よ、わたしたちに御父をお示してください」(14:9)と懇願した。するとイエスは、「フィリポよ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっているのか。わたしを見た者は父を見たのだ。何故信じられないのか」と言われた。

彼らは弟子の寂しさと不安を正直に言ったにすぎない。だからイエスは「君たちを孤児にはしない」(14:18)とし、「父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにして下さる」(14:16)と約束したのだ。(長崎哲夫牧師の説教要約)